

地域活動を支える個人・組織間のつながりの形成要因

—人口減少と市町村合併に伴う生活圏域と生活サービス手法の再編—

正会員 ○花原裕美子*1
同 友清 貴和*2
同 本間 俊雄*2

地域活動 個人 組織 ネットワーク

1. はじめに

1-1. 研究背景・目的

少子高齢・人口減少時代において質の高い住民生活を守るためには、既存の行政サービスに代わる地域活動などに存在する個人・組織間のつながりなど（いわゆるソーシャル・キャピタル）が大きな役割を果たすと考えられる。しかし、地域活動に存在する人と人とのつながりの成立とその継続要因は未だ理論的な解明に至っていない。そこで本稿は、地域社会におけるつながりをノード（点）とリンク（線）からなるネットワーク理論の視点で捉え^{註1)}、「つながり」の成立する最小単位である、2ノードを対象に、地域活動を事例として個人・組織間のつながりの成立と継続に関わる形成要因^{註2)}を明らかにすることを目的とする。

1-2. 調査の概要

調査は地域住民主体で活動を行うサロン活動^{註3)}や防犯ボランティア活動^{註4)}などを対象とし、公民館などの活動場所で、その活動過程や活動内容を中心に、これまでに形成したつながりについてヒアリングを行った。

2. つながりの形成実態

図1は活動にみられるつながりの内容を記載したものである。事例Aで、高齢者サロンが形成しているつながりは、形成相手の組織の種類に着目すると、大きく2種類に分類できる。ひとつは自治会などの地縁組織との「水平的」なつながりであり、他方は社会福祉協議会との「垂直的」なつながりである。これはつながりを形成する組織間の関係を表し、同質の組織との連帯関係や、異なる組織種別とのつながりの質の違いを表す。また組織の活動分野に着目すると防犯ボランティアは地域の安全を守るという活動分野から、それに「類似」した活動を行う警察署や消防署とのつながりが多くみられた。

3. つながりの形成要因

図2はつながりの形成過程とその要因について整理したものである。ほとんどのつながりには、形成以前にいくつかのつながりが存在し、個人や組織がすでに形成しているつながりが、その後の形成を強化するような随伴性を持っているといえる。また、さまざまな刺激や条件などのつながりの形成要因は以下のように整理できる。

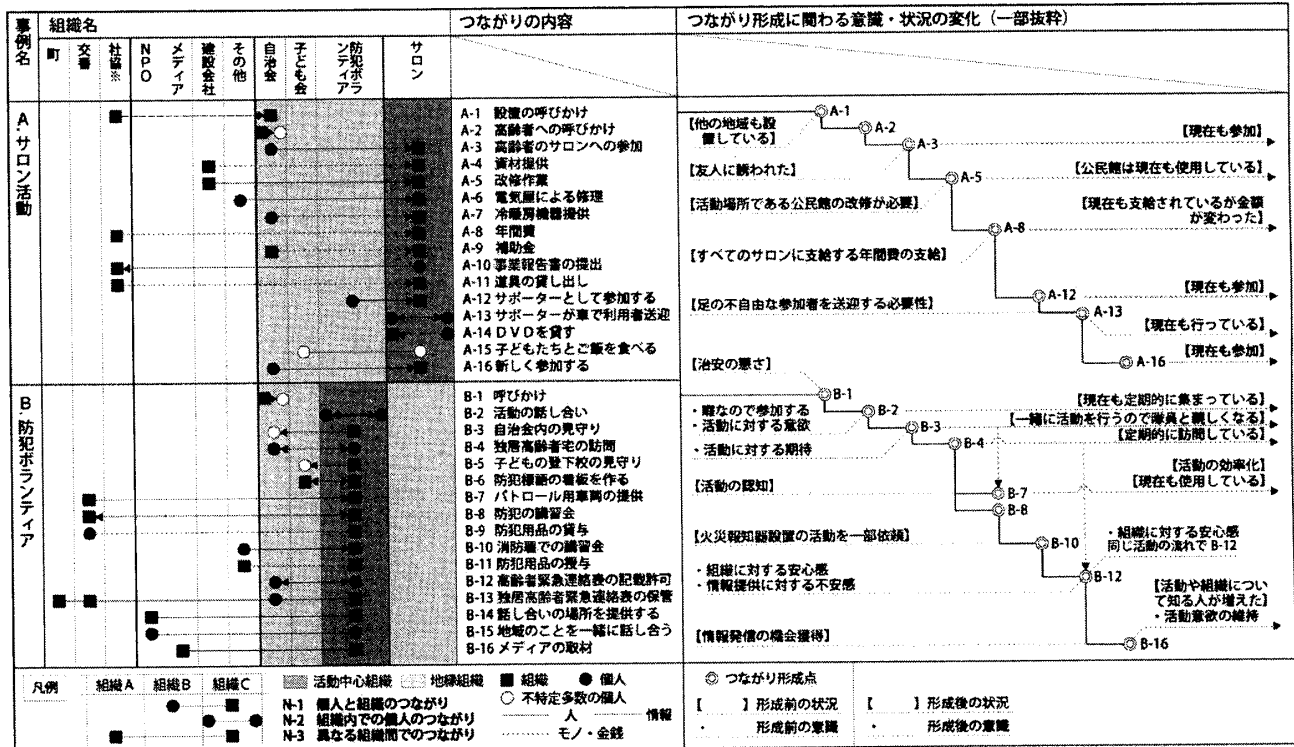


図1 活動にみられるつながりの内容

※社会福祉協議会の略称

Network Formation Factor between Individuals and Organizations in Regional Activities.

-Reorganization of living range and life service technique corresponding to population decrease and consolidation of municipalities-
HANAHARA Yumiko, TOMOKIYO Takakazu, HONMA toshio

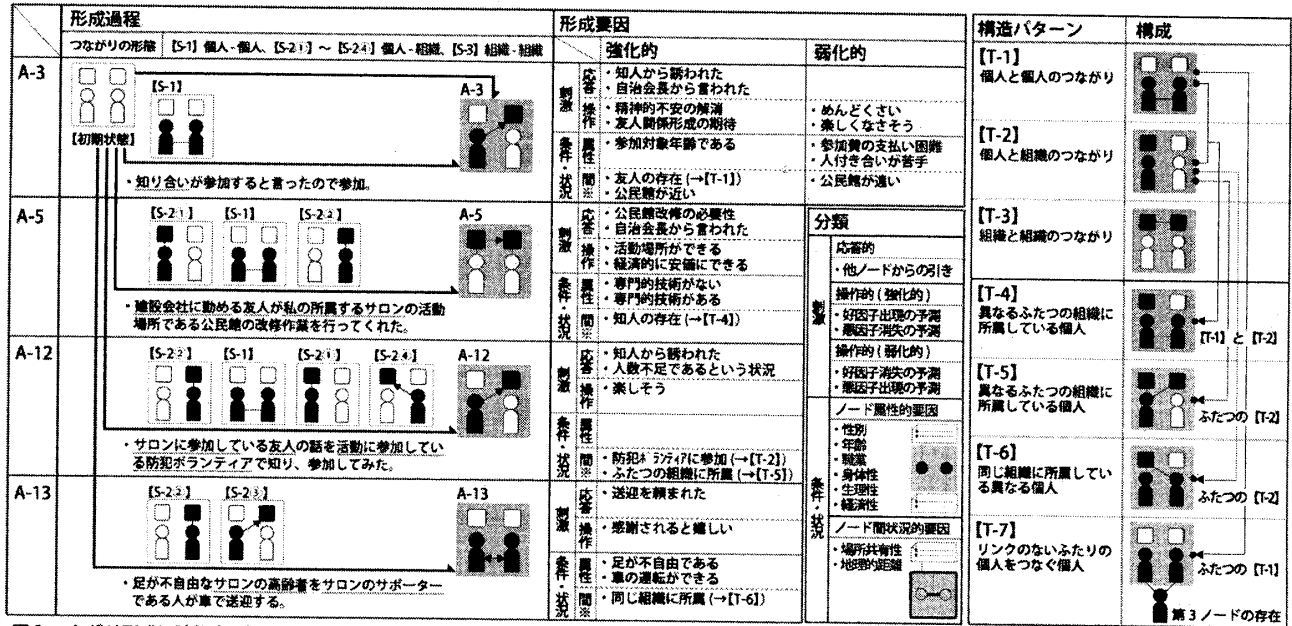


図2 つながり形成に伴う構造要素とつながりの形成要因 (一部抜粋)

*ノード間状況

図3 構造パターン

1) 強化的／弱化的要因

形成要因には、形成を強化する刺激や条件・状況である「強化的要因」と弱化する「弱化的要因」がある。これはノードが受けとる刺激や属性、対象とするノードとの位置関係、ノードが外部に形成している構造などの形成要因の性質を大別するものであり、新たにつながりが形成されるかどうかという点において重要なものである。

2) 応答的／操作的刺激

つながりの形成には、形成以前に発生する刺激や条件を受けて形成する応答的なものと、行動の後に発生する状況を予測して形成する操作的なものがある。どちらの場合も、つながりを形成することでノードにとって良い因子の出現が期待できれば強化的な要因なる。しかし、良い因子の出現が期待できず、悪い因子の出現が予測されれば、弱化的な要因になるといえる。また、友人からの誘いや、地位が上にある組織や個人からの誘いや依頼などは断ることが少なく強化的な場合が多い。

3) 属性・状況条件

属性は性別や年齢、職業、身体的、技術的などの個人の性質や特徴のことであり、属性の似たノードとはつながりの形成の割合が大きい。一方で、自分に不足する技術を補足するためにつながりを形成する場合もあり(A-5)、必ずしも属性の同じノードどうしがつながりを形成するとはいえない。また、公民館が近いから参加する(A-3)などというように、ノードとノードが地理的にどのような位置関係にあるかということも形成要因のひとつである。ただし、活動場所が遠いが参加するという人もいれば、近くでも参加しない人もおり、地理的距離の他にも活動

に対する個人の意識なども関係している。

4) 構造的条件

図3はつながりの形成過程を整理することで分類された7つの構造パターンである。調査で得られたつながりは初期状態(リンク0)から形成されたものは少なく、多くがこれらのつながりを形成した後に形成されたものである。特に【T4】～【T6】の2ノードと2リンクで構成される構造パターンが多くみられ、これによって、ノード単独ではリンクをもつ確率の少ないであろうノードに対してリンクを形成している。またノード間にリンクのない2ノードをつなぐキーノードの存在も示された。

4. まとめ

つながりの形成に関わる要因は多く、性質もさまざまである。また形成されたつながりは一過性でなく、他のつながりに対して随伴性をもつ。今後は、地域生活サービスのネットワークモデルの構築に向け、今回の研究で得られたような形成要因を抽象化、数量化を行う。

【付記】

本研究は、平成20年度科学研究費基盤研究(C)(課題番号20560574)の補助を受けたものである。

【註記】

- 註1) 本稿は地域社会におけるネットワークを探ることで、グラフ理論により地域生活サービスモデルを構築し、シミュレーションすることを目指す研究の初段階として位置づけられる。
- 註2) 成立とはノードとノードが新規にリンクをもつことであり、継続とは成立したつながりを意識的に維持、活用することである。成立や継続など、リンクが存在している状態を形成という。
- 註3) 社会福祉協議会による事業で、活動内容や形態は地域により異なる。この地域のサロンでは民生委員や福祉アドバイザーを主体として公民館で季節の行事や健康体操などを行っている。
- 註4) 地域内の治安の悪化を危惧して結成された防犯ボランティアで、定期的に見回り活動や清掃活動を行っている。

*1 鹿児島大学大学院理工学研究科・建築学専攻 修士課程
*2 鹿児島大学大学院教授・工博

*1 Graduate Student, Graduate school of Science and Engineering, Dept. of Architecture, Kagoshima University
*2 Prof., Dept. of Architecture, Kagoshima University, Dr. Eng.